

Title	平成元年度卒業論文題目 ; 平成元年度修士論文題目,論文要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1990
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.59, No.2/3 (1990. 7) ,p.168(338)- 181(351)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19900700-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中の小川英雄「ゲシュルとエン・ゲヴ遺跡」（五八四—五九六頁）参照。

(小川英雄記)

平成元年度学部卒業論文題目

国史学専攻

(志水正司担当)

邪馬台国—倭人伝と考古遺物の語る—

仏教の伝来と受容について

日本古代の女帝とその特質

蘇我氏の登場と進出

壬申の乱における東国と騎兵

柿本人麻呂—和珥氏と宮廷歌の基盤—

高松塚古墳

—東アジアの史的位置づけを中心にして—

藤原吉麻呂

郡司の任用について

藏人所の設置とその性格

王朝女流文学の背景—紫式部を中心として—

(三宅和朗担当)

九・十世紀の土地相論と国・郡衙

—当該期国衙機能解明のための一考察—

『日本書紀』における東漢氏の動向について 木崎克也

(高橋正彦担当)

海上船の風上帆走の可能性について

稻本勝也

南北朝初期の守護制度について
中世猿楽座の組織と機能について

将門の乱における軍事構成について
起請文を通してみる中世

宇津木聰子
奥原徳浩

上野守護山内上杉氏と上野国人の関係について
中島美保

南北朝初期の守護制度について
中世猿楽座の組織と機能について

将門の乱における軍事構成について
起請文を通してみる中世

南北朝初期の守護制度について
中世猿楽座の組織と機能について

将門の乱における軍事構成について
起請文を通してみる中世

北条氏政と大田氏房親子の岩付領支配について
—「太田氏証文」と「氏政証文」を通して—

檀家制度の成立—寛永期を中心として—

寛文三年武家諸法度における殉死禁止令に関する一考察

(田代和生担当)

檀家制度の成立—寛永期を中心として—

寛文三年武家諸法度における殉死禁止令に関する一考察

幕末長崎の金融研究序論

江戸における土地売買と土地私有権について

(柳田利夫担当)

織田信長の自己神格化と津嶋牛頭天王

比叡山焼き打ちと近江攻略

外様大名の婚姻について

東京裁判におけるA級戦犯の被告選定過程と

稲本勝也

赤木妙子

大野正貴

岡村幸彦

中野麻里子

木村仁賢

宮野晃男

升田幸治

谷城義明

小林元

高橋一郎

森邦弘

渡部篤史

清水伸太郎

高橋健

中村泰彦

大森邦弘

宮林宏幸

小島美保

谷城義明

古田智子

田中聖子

立石木綿子

加藤要一

岡村幸彦

A級容疑者の釈放過程 相撲興行に対する幕府政策	尾崎満
近世初期の代官的豪商の性格について —末次平蔵の経営を通して—	川真理
『近事評論』の沖縄論 井伊直弼の天皇・朝廷観 (坂井達朗担当)	久良康子
植木枝盛—その無限進歩の思想— 明治初年の警察—「番人制度」を中心として— 陸羯南の女子教育思想について	下世古曉子
近代日本社会の階層構成に関する一考察 —俸給と旅費を指標とした階層化の試み— G H Qの戦後政策	黒沢徹
ーシャウプ勧告を中心として— 興復社に関する一考察	小玉太郎
大政奉還運動期における宇和島藩の動向	土田啓二
松室信雄	日朝秀宣
ナチスの政権獲得と経済界 フランス人民戦線政府の経済政策	鳥潟素子
シトー派修道院所領經營の問題点 ジャヌス・グルクと騎士道精神	平田亜佐子
騎士の台頭と没落—戦術史的考察— 十七世紀フランスにおける演劇と宗教の対立について	弓削達哉
ルネサンス期におけるフィレンツェ毛織物工業	森田恵
植民地時代におけるペンシルヴァニアの特異性について	藪下正江
アメリカ史におけるニューディール政策の意義	渡辺圭
形成過程についての一考察	赤峰桂子
西洋史学専攻	有田晃之
ユダヤ系アメリカ人と同化の問題 ユーゴスラヴィア・ナショナリズム	岡本英敏
松本外交の外交スタイルの形成過程	石井聰人

教皇マルティヌス一世のクリミア流刑

小林昌樹
名波彰人

エドマンド・バークとトマス・ペインの論争について

今橋学

イタリア南部問題

田沢弘

川崎正裕
服部敬久

ドイツ社会民主党

「改良主義勢力と修正主義の出現過程—

長谷川和弘

十九世紀における保守党の変遷

木下真理

ヴィクトリア時代のジエントルマンについて

龍崎真

一八七〇年初等教育法についての一考察

原純代

一九三〇年代九月の国会選挙における

ナチスの躍進に関する一考察

ヴィクトリア朝の家事奉行人に関する一考察

和田さつき

イギリスパブリックスクールにおける教育の中のスポーツ

美川卓三

一スボーツマンシップ・チームスピリットを探る—

藤井英司

十八世紀ロシアの後進性とその西欧化について

小野里晴子

東洋史学専攻
利刀の幻想

新井高子

フランス絶対王制期の宫廷貴族層の実情と

田中百合子

一『点石斎画報』からみた清末の医療感覚—

植頭安里

フランス史のうえでの位置づけ

小野川史子

纏足から天足へ

小渕一人

十六・十七世紀イギクランドの魔女狩りに関する考察

谷口範光

一擬似纏足としてのハイヒール考—

河野亜美

七月王政から二月革命にかけての労働者の運動

田中百合子

中国の犬祖神話

大平克也

スペインからみた十八世紀前半期のヨーロッパ国際関係

宮原京子

曹魏政権の性格

岡有美

政治家としてのアレクシス・ド・トクヴィル 内野漠

森英樹

天津・一九四〇年
一笑いのメディアとしての「相声」—

小渕一人

十八世紀オーストリアの選択

中村律子

ケーララとイスラーム
—伝来から一五世紀まで—

河野亜美

—財政状態は政策にいかに反映されるか—

プロイセン絶対王政における官僚制とその性格
—映画監督謝晋を中心として—

『クリミア戦争外交史』にみる Hayrettin Bey の思想	西沢 静夫	南スラブのザドルーガ	若月 憲子
六朝期の流通に関する一考察	野島 正宏	東京内湾の漁業について	小林 三希子
中国史における王安石觀の変遷	芳賀 裕子	江戸・東京における神社とコミュニティーの空間構造	相沢 龍也
近代カイロの拡大	榎田 啓之	都市化の中の祭—青梅祭をめぐって—	高橋 佳恵
一四世紀マグリブのイスラーム	武藤 亜子	同潤会アパートメントの誕生とその時代	為ケ谷 正明
—イブン・クンフズの視点を通しての考察—	吉崎 恵	クルド民族誌の研究	内藤 正彦
異端の群像—紫禁城を去った Eunuch たち	山本 郁	時間意識にみる中世ヨーロッパ	
一一世紀のアル・アンダルスにおける	柳田 奈穂子	アケメネス朝ペルシャにおける王族の伝統的葬制	
ユダマ人コミュニティー	小林 正和	先土器新石器時代のイエリコ	石井 洋介
一〇一一三世紀エジプトにおける商業	吉崎 恵	—特にその生業を中心として—	側島 裕子
扶鸞と民衆—清末・明初の新宗教を中心にして	柳田 奈穂子	英國のジェントルマン理念とスポーツについて	
民族考古学専攻	黒川 直治	荻生徂徠の教育観	平林 千明
先土器時代における遺物集中部の空間構成	深沢 大輔	今和次郎の世界—その志向するもの—	田村 俊子
慶應藤沢校地内遺跡における	深沢 大輔	古鏡の形態と出土状況	吉田 和江
縄文時代草創期の石器製作活動について	林 子平	—日本出土の中國鏡を中心として—	福井 けい子
—寺尾遺跡出土の剥片との比較を通して—	横山 英子	江戸の水害について	佐藤 照子
中世移行期における土器生産の『転換』をめぐって			
—月夜野窯址群の周辺—	阪本 宏児		
前方後円墳築造企画性研究の意義について	宮本 秀之		
『山陰地域』の四隅突出型墳丘墓	山田 真一		
有珠10遺跡出土の『耳石』の分析	鶴沢 和宏		
—漁期推定のため基礎的研究—			

秋田美人についての考察
伊万里焼に関する一考察

次 田 吉 明
木 村 淳 子

(修士論文要旨)
荆蛮に走る王

(地方の焼物から世界の伊万里への道)
江戸時代における書法の性格とその意義

マキャヴァエリの政治理想をめぐつて
正統と異端

星 野 金 城
岸 本 富 代
池 田 百 合 子

渡辺華山—洋学との関わりを中心として—
(ヴァルドゥス派の異端宣告を中心として)
アケナテン王の治世

金 田 恵 美 子
村 田 加 代 子
大 藏 純 司

（その政治と宗教について—
神奈川県の自由民権運動—三浦郡を中心にして—
アル・アンダルスにおける

藤 岡 達 也
好 井 優 美 子

宗教的・人種的構成と階級構造について
物資交流の復原的方法の可能性について
—石材からみた近畿地方の古代文化交流—
白バラ抵抗運動の実像

河 合 玲 子

萩藩における本陣の研究

浅 見 雅 一

平成元年度修士論文題目、論文要旨
国史学専攻

教会史料を通してみた張獻忠の四川支配

東洋史学専攻
中国近代化と風水
斎 藤 斎

およそ今日まで、個別にその始源や族源が問われてきた中国周辺国家の始祖説話は、それを比較して論ずるなら、ほとんど一約定とも言うべき論理のもとで整合され、同一の要素を指摘することができる。本論文では楚・越・朝鮮・滇・倭などの蛮夷の始祖説話について考察を加えた。それはまず第一に、華夏の王子が、例えば王室に忠義を立てて不幸な境遇に甘んずるといった両義的価値を背負い、次に王室から奔走して服装をかえて蛮夷の習俗に改め、最後に蛮夷の始祖となるといった伝承の定型が踏襲されている。そこでは華夏の王子と蛮夷の王、中華の服装と文身断髪、至徳の者にして悲劇の主人公といった二つの世界を懸橋する説話の二面性が明らかである。

従来までは、なぜ蛮夷の始祖が中原の帝王の系譜に遡及されるのかという問題について一つには中原からの民族の遷移や民族系統を論じる立場があつた。しかしながら中国の対周辺観・異族観をひとくなら、世系・系譜の継承と、華夏と蛮夷の区別とは別次元の問題であると考えられ、華・夷の枠組みを血縁的帰属や民族集団に置きかえようとする方法は、有効であるとは思われない。またその一方で、蛮夷の華夏出自についてそれを華夏の側からの支配・服属理論として説き明かそうとする見

方は強いが、楚・吳などの始祖説話について仔細に検討を加えるなら、蛮夷の王権説の華夏の王権説との間に構造的な対応関係を考えることができ、始祖を求める動きは、蛮夷の側の要請論理であることを無視することはできない。朝鮮王衛満のような歴史事実とされる外来の王権も、吳の太伯や楚の祝融、箕子朝鮮のような象徴的な外来の始祖も、支配の正統性の実現のために外在的に呼び起こされる必要があったのではないか。

例えば現代の少数民族の間でも、彼らの言説の中に王子の奔走をもつて語られる華夏出自説が実現されていることが知られている。このことはこれまで歴史研究の場において「儒家の作為」といって評価しか与えられていなかつた蛮夷の華夏起源説について、それが境界のある二つの世界が存在する時に、その二つの世界を取り結ぶ普遍的で根本的な結合秩序であることを理解させてくれるのである。

中国古代王朝に於ける

「先王之樂」觀の変容について
—「六代樂」考を中心にして—

倉田 こずえ

古代中国に於て「音樂」にはある種の政治効果が期待されていた。『荀子』樂論篇には次のように論ずる。「人欲に節度がなければ社会に混乱をきたす→古の先王は乱世を憂え、規範となるべき「禮」樂を制定し→節制によって理想社会を具現する」つまり「礼」樂とは「先王の定めた」理想の規範としての抽象

的な存在であった」といえよう。

「先王」の概念はしかし、右のように確立していったのだろうか。「正」を標榜するとあれば、論者・王朝等の恣意に応じ、寧ろ概念自体の操作、意義変容が必至ではなかつたか。

「礼」樂は漢初以来、王朝毎に改められる。「理想」である以上は不變の制度であるべきで、更改は矛盾的だが、時々の權威を示すためにはこれは正当化する必要があつた。そこで淵源を異にする「五帝三王の樂」の思想を根拠に「先王の樂」の複数存在と互間の更改を説くようになつたのが、変容の第一段階であつた。『礼記』樂記篇には両説が混在し、このことを示唆している。更に、周礼に定め、通常黃帝・堯以下六聖王の樂とのみ解される「六代樂」についても同じく時代的変容を指摘することができる。「周六樂」の構成論理の拡張「前五代の樂に加うる当代制作の樂」というのが共通原則で、その目的は、自代の功德をより強調すると同時に前累代の權威を継承することにあつた——と推される。

本稿の指摘は以上に留まるが、次の段階としては「前代」に求めに「權威」についての具体的な検討が必要となろう。大槻としては、漢代以降制作された、言わば「世俗の先王」の樂が繼がれるようになつたつまり「正統」を「聖王の伝統」といった原義のみで計ることは既にできなくなつていて、また「先王」というタームを用いて言えば、伝承の「古聖王」から、世俗の「前王」を含む概念への転化が行われた、という事情がある。そしてここからは、各王朝に於て何らかの政治的な思惑が

派生したことが想定されるであろう。

一九世紀末のバクーとバツーム

古賀敦子

カスピ海と黒海に挟まれたザカフカースは、古来、多言語・多民族地域として知られるとともに、その地理的条件から東西の様々な民族が往来する地域であったが、ザカフカースのほぼ中央に位置するチフリスを除いて、都市といえるほどの都市は存在しなかった。ところが、一九世紀をむかえてザカフカースのほとんどがロシア帝国の支配下にはいると、当時世界的に注目を集めつつあった石油資源の開発によって、まずバクーが、おくれてバツームが、チフリスに続く新興都市として発展した。

その結果、石油ブームに沸く両都市には様々な地域から企業家労働者達が流れ込み、人口は急激に増大した。とともに、一九世紀末以降、両都市で新旧住民の衝突が頻発していたことが、旅行記その他に報告されている。

つた。しかも、彼らは主として官吏・軍人・資本家といった職業に就いており、主として石油採掘、輸送、港湾作業などに従事していた旧来の住民に対して政治的・経済的支配グループを形成した。旧来の住民にとっては、こうした階層化の進行が、新来の住民との民族的・宗教的差異を強く意識させ、現実への不満と結びついて、敵意にまで成長するきっかけになつたのではないかと思われる。

(西洋史学専攻)

古代ギリシャにおけるデルフィの

アポロン神託と植民活動について

川合深雪

古代ギリシャにおいて、神へのお伺いは国事であり、時代が下ってローマにおいてさえ、國家の指導的立場にある者や軍隊指揮官は、何か事を興す前には義務として神託を伺い、吉凶を卜さねばならなかつた。

地母神信仰として始まつたデルフィのアポロン神託は、ギリシャでの地理的中心位置にあつたことと、奇しげな恍惚状態の巫女ピュティアによるお告げで、次第に参詣者を集め、ついには国政を占い、将来を予言するほど盛況を極める。

本稿では、ポリスの一大事業であった植民活動と、デルフィのアポロン神託との関係について考察を進めていく。また、植民地を南イタリアとシシリー島に限定しているが、これは最古

のギリシャ植民地であるナクソスを始めとして、多くの有力植民地がこの地方に続々と建てられたこと、比較的明瞭で詳しい神託文が残っている、という理由からである。歴史的にも、紀元前七世紀には重要な貿易エリアとして栄えるイオニア海へ続くコリントス湾の高台にあつたデルフィの位置は、西方植民地との特別な関係を、デルフィに与えていたと思われる。

第一章では、アポロン神託と様々な植民活動について、民族移動の例も混えて紹介し、第二章では、南イタリアとシシリー島にあるレーギオン、シラクサ、クロトン、タレンツム、ゲーラの五植民地について、残存する神託文に基づき、その発祥、成立過程、母市との係わりなどを論じている。

しかし、デルフィのアポロン神託について、ある結論を出すのは容易なことではない。それは、神託自体がギリシャ人の生活、思考の枝葉末節に至るまで行き渡つてゐながら、予言という曖昧で、漠然とした形態の中に存在しているからである。また様々な問題を含んでおり、不可解な託宣についての判断を下したり、本物か偽物かの推論を試みたとしても、神託自体の影響力は、その様な域にとどまるものではない。そして告げられた託宣において、ピュティアの言葉が、どの位まで伺い人に指示を与え、すでにある決心をしてきた伺い人の真意を、どの位まではつきり明示出来たのか、完全には解決されない疑問が残るのである。

デルフィが、ギリシャ世界における多くの事のおこりに対して、中心を与えてきたという事実は、この当時のギリシャにとつ

て、計り知れない程の意義があつたであろう。なぜならば、各ボーリスはそれぞれ独立の単位となりたがる傾向があつて、お互に同士何らかの共通性を持つとはしない風潮があつた。この様なギリシャ社会様なギにおいて、全ボーリス市民が同じ言葉で神意を伺い、同じ作法で神のお告げを待つた、というデルフィのアポロ神託は、ギリシャ人が共有する唯一のものだったのである。

ドイツ農民戦争期における

「神の法」「思想と」「一二二ヶ条」

野々瀬 浩司

「神の法」とは何だつたのだろうか。それは、中世末のドイツで頻繁に勃発した小規模な農民蜂起、つまり、村落共同体の既得権を主張する「古き法」をめぐる戦いとは異なり、地域・文化・社会階層などのこれまで人々を隔てていた様々な障害を克服し、超領邦的な運動にまで発展した一五二二年のドイツ農民戦争を特徴づける重要なメルクマールの一つであつた。しかもそれは、宗教改革の思想、取り分けツヴィングリの影響を受けて成立し、「公益」や「兄弟愛」という言葉に表現されていくように、平民（Gemeiner Mann）を担い手とした共同体を中心とする国家を志向し、したがつて、まさしく封建的社會秩序を転覆するような革命的な性格を内包していたというのである。以上が、P.ブリックレ『一五二二年の革命』（刀水書房）の中に書かれている「神の法」理解の概要である。

私が今回の修士論文で試みたことは、彼の「神の法」理解の

問題点・不足点を提示した上で、「神の法」思想の普及に最も貢献した農民たちの重要な抵議書の一つである「一二ヶ条」とそれが編纂される際に土台となつたとされる「バルトリンゲン地方の諸抵議書」との比較を通して、「神の法」思想がいかなる形で「一二ヶ条」において形成されたのか、その過程を分析し、ブリックレの見解を検証しようというものであつた。その結果、明らかになつたのは以下の五つの点である。

①「バルトリンゲンの諸抗議書」の段階での要求内容が持つ地域性や主義性が、「一二ヶ条」では徐々に克服されつつあつたという経緯から、「神の法」思想は、農民戦争が超領非的な運動へと発展した事実と何らかの形で関係していた。②「神の法」と宗教改革との関係は、「一二ヶ条」の成立以前では、宗教的衝動の痕跡が見られるものの、その思想的連関はほとんど認められず、むしろ農村では、「一二ヶ条」によってはじめて真の意味での宗教改革が開始されたのではないかと推定しうる。③「神の法」は、ブリックレが指摘するような福音ではなく、むしろ自然法的要素を多く含んでおり、しかも「一二ヶ条」において中世以来の様々な法思想が流れ込んで編集されたものだと考えられる。④「神の法」と「古き法」との関係は、ブリックレは両者に宗教改革を契機として段階的な差があると考えているが、私は「バルトリンゲンの諸抗議書」の段階では、「神の法」思想に関して前時代との連続性が多く認められることから、宗教改革に影響されてそれに質的な変化が生じたにしても、両者は中世以来並存していたと考えられるのではないかと推定した。

十四世紀前半、都市フィレンツェにおける穀物供給政策

松本佐保

十三世紀末から一三四八年の黒死病の発生までの僅か半世紀の間に、フィレンツェ都市は目覚ましい経済発展とその厳しい不況を経験し、このことは当時の社会を様々な局面で揺さ振った。こうした社会変動に応じてフィレンツェ都市政府が行使した穀物供給政策と、これに見られる都市内の社会層の関係の変遷を追跡し、ルネサンスを生み出す経済的基盤を形成した、社会的・歴史的大ynamismの一端を明かにしようと試みた。

第一章では、「十四世紀前半フィレンツェの社会、経済、政治的背景」と題し、フィレンツェの経済構造、社会構造と政治組織の全体像を見渡し、経済発展に伴う人口増大やこの経済発展の柱であった毛織物工業に携わる多数の労働者の存在など、穀物供給政策が打ち出された背景を明かにした。

第二章では、「穀物六人委員会の構造」と題し、穀物供給機関である穀物六人委員会の組織や構造、権限について主に都市の法規定(Statuti)に基づいて述べた。第一章で述べられた経済発展に伴う穀物供給問題の重要視は、この機関の法規定に見

⑤ブリックレが考へてゐる以上に、「一二ヶ条」を編集した知識人たちの役割をより積極的に評価すべきで、平民に集合理性が存在するという主張は、「一二ヶ条」が成立する以前では、ほとんど賛成できない。

られる多大な権限や、政府の中核機関であるシニヨリーア(Signoria)との密接な関わりから読み取れる。

第三章では、「穀物六人委員会の活動」と題し、穀物商人の日記をもとにこの機関の実際の活動、穀物供給に関する違反行為が記されている裁判記録からこの機関の限界、そしてここから都市内の各社会層である大商人層、中層民、労働者の穀物供給政策をめぐる利害関係を解明した。これによると都市人口の三分の一を占める下層民の不満を抑えるために、都市政府は穀物を輸入すると共に、厳しい法規によって違反の常習者である中層民を取り締まり、穀物が下層民に行き渡るよう配慮した。

しかし、一方で都市政府の大半を占めていた大商人層は、それを取り締まるべき立場にありながら、その違反行為を自ら行つて中層民に加担し利潤の拡大を図ろうとした。都市政府の安定期には、こうした違反行為のために穀物供給がうまく機能しなくとも、その責任の中層民への転化が可能だった。

第四章では、「穀物供給政策と権力闘争」と題し、前章で裁判記録を通じて明らかになつた一三四三年を境とする穀物供給に関する違反行為の極端な増加と、政治史上の変化を並行して見た。一三四〇年代に始まる極端な経済危機によって大商人層は権力基盤を失つて弱体化し、代つて力を持ちつつあつた中層民による多くの違反行為を許すことになる。こうした違反行為は下層民への穀物供給を妨げ、不満を抱くようになつた下層民に、中層民の排斥とその権力回復の機会を狙つていた大商人層が呼びかけ、扇動し穀物暴動へと至つた。

このように、フィレンツェ経済の危機による大商人層の弱体化と中層民の台頭という、従来の階層間の権力均衡の解体と社会構造の変化が、一三四三年の穀物暴動と密接に関わっていたと言えるであろう。

以上の考察によって、十四世紀前半フィレンツェ都市の社会体制とその歴史的動きを多角的に捉える試みを、一步進めることができたのではないかと考える。

闘争期におけるナチスの地方党组织

一大管区シユレスヴィヒ・ホルシュタインー

住 司 憲 史

ナチスはヴァイマル共和政下の合法的な国会選挙において党勢を拡大し、百万を越える党员を有した紛れもない大衆政党であつた。このナチスの台頭過程を解明しようとするならば、当然、ナチスが末端の民衆に対して如何なる宣伝活動や組織活動を行なつたのかが明らかにされねばならない。本稿は、以上のような課題に答えるべく、考察の地域を北ドイツの大管区シユレスヴィヒ・ホルシュタインに限定し、この地におけるナチスの地方党组织活動の全体像を描こうとするものである。またその事を通じて、ヴァイマル共和国期にあつては、ナチスの他にも数多くの民族主義極右団体が存在したが、何故ナチスだけが、大衆政党として飛躍しえたのか、という問にも答えようとした。

ヴェルサイユ体制打破を主張し、民族共同体の設立を謳い、

恐慌期に経済的インタレストを孤立化させつつあつた農民などに対応しようとしていた政治組織は、決してナチスに限られていた訳ではない。私の考察した大管区シユレスヴィヒ・ホルシュタインでみる限り決定的要因と思えるのは、ナチスには他の政党ではない、末端の党員の圧倒的ともいえるエネルギーがあったという点である。これは本稿において考察した、ナチスの大衆集会の開催数などに明瞭に表れている。ナチスを国会選挙の第一党にまで押し上げたのは、結局のところ、ヒトラー個人のカリスマよりも何よりも、自生的・草の根的な大衆運動をつくつていった地方の末端の党員達だったのである。

さて、それでは彼らの巨大なエネルギーは一体どこから生れたのであろうか。一つには多くの古参党員に共通する、一次大戦での前線体験にあると思われる。彼等前線世代の多くは、戦後の生活に適応できず、言いようのない憤りを抱え、一次大戦直後からナチスと似たような民族主義運動に身を投じていった。だがこれら極右組織の内部における役割は、殆ど軍隊時代の階級に従つて割当てられることが多く、若い世代はどんなにやる気があろうと能力があろうと、昇進への道は殆ど閉ざされていたのである。ナチスとこれらの極右組織を決定的に区別するのは、ナチスは対等の条件の下で、持てる才能と努力によつていくらでも組織内における昇進が可能であつたという点であつた。次々に増える地方支部は、末端の党員達にとっては、社会的地位も階級も学歴も出自も関係なく、己の才覚と努力で如何にも昇進できる城だったのであり、その実績如何では、実

際の社会では考えられないような昇進への道が開けていたのである。彼等はそれまで、自分達の置かれた現状を打破しようという強烈な志向を持ちながらも、同時に自らの存在を受けとめてくれる確固とした力をも熱烈に求めていた。それがナチスだったのであり、ナチスの勝利は未分化で浮遊したヴァイマル期の精神状況の大きな転換を象徴する事件だったのである。

ウェーバーの市民層概念と

イギリス地方史研究

真木 康彦

人はすべて何らかの共同体の中で生活しているが、この共同体を破壊し新しい社会構造を形成しようとする原動力が、経済的利害関係のみならず理念信仰などによってもたらされたということが歴史上現実にありえたというウェーバーの問題提起は、現代の日本の諸問題を考えると大変興味深く感じられる。

ウェーバーの普遍史的課題——賤民的・非合理的資本主義とは範疇的に明確に峻別される市民的・近代的資本主義が近代西洋においてのみ発生しえたのはなぜか——に対しては、内的側面と外的側面からの考察が必要となる。前者については主として宗教社会学で考察されるが、呪術からの解放、及び彼岸と此岸の緊張関係を持つた宗教倫理の確立、の二点が最大の画期点となる。後者については実際に様々な要因が考察されているが、労働力・商品生産手段等が自由な市場において取引きされうるかどうか、すなわち種々の経済外的強制からの解放という点が最も

重要となろう。そしてこの内外両側面からの近代化過程を推進した共通の担い手として、近代西洋的市民層の果した役割をウエーバーは高く評価している。

このウェーバーの理念型とは別に、サースクの提唱したイングランド農業地帯の二類型も、前述の問題と関連を持つものとして考えられる。これは一六〇一七世紀前半のイングランドでは、自然条件によって高地と低地に農業地帯が二大別されるのであるが、この二類型は耕地形態・鉱工業立地の有無・住民の性質等の社会経済構造の相違とも対応するというものである。

このサースクの理論は、同一の社会経済構造から手工業立地及び宗教上の不服従という異なる特質が同時に生じうるというものであり、ウェーバーの宗教社会学と重なり合うものでは勿論ない。しかし前述の問題を考察する際の一つの視点として有効であると思われる。

次にこのサースク理論に沿ってケント州の事例について検討する。ケント北部の低地地帯は穀作を中心とする混合農業地帯だったが、共同耕地の欠如・平穩な早期小土地囲い込み・大莊園の面積など、サースク理論に対する例外的地域と考えることができます。これに対しても、ウイールドと呼ばれる南部の森林地帯は、牧畜を主とする混合農業地帯であり、相続慣行を除いては耕地・定位形態・手工業・非国教徒の存在など、典型的な高地帯であるといえよう。毛織物工業の經營形態は、織元が問屋制支配により主に織布工程・紡糸工程を農民に請け負わせていたが、毛織物工業地帯である中ケントは非国教徒も多く、織元

がその基盤の重要な一部を成していた。一方、鉄鋼業は、非国教徒の少ない西ケントに立地し富裕な少数の溶鉱炉所有者その雇用労働者及び前者の間屋制支配を受ける半農半工の鍛冶屋があり、毛織物工業とは經營形態が異なっていた。中ケントのウイールドでは、農業構造が、毛織物工業の立地と非国教徒の発生に影響を与えたものと思われる。

(民族考古学専攻)

考古学資料による祭儀の再構成に関する一試論

西島万佐代

—アクロティリ遺跡の場合—

ガンダーラ美術成立の文化的背景に関する研究

藤原達也